

# 高梁川改修と東西用水酒津樋門

岡山県倉敷市  
JR山陽本線「倉敷駅」からバスで「あけぼの橋」下車。徒歩10分

資料提供: 3-6.8-11.13.高梁川東西用水組合  
出典: 1.『高梁川改修工事概要』 15.『土木建築工事画報 第3巻第1号』  
撮影: 2.7.12.14.16.樋口輝久

## 高梁川改修事業 — 東西二派を一本化 —

中国山地を源とする高梁川は、鉄穴流しによる大量の土砂の流出や、瀬戸内沿岸で行われていた製塩業が燃料として大量の木材を必要としたことから森林が荒廃し、たびたび洪水が起きていた。特に明治25(1892)年と翌26年の大洪水では未曾有の水害に見舞われ、地元は高梁川の改修工事を国に強く要望した。その結果、明治39(1906)年に帝国議会で可決され、翌年から内務省直轄で、第一期治水計画20河川のうちのひとつとして、高梁川改修事業が着手された。

改修工事は、東西二派に分流していた高梁川を一本化し、河口まで20数kmに及ぶ堤防を築く一大工事であった。具体的には、小田川との合流地点である現在の総社市清音古地で西高梁川を締め切り、酒津までは東高梁川へ流す。次に酒津で東高梁川を締め切って、新たな川筋を開削して、水江で西高梁川に合流させるというものであった。なお、古地から水江までの西高梁川は、柳井原貯水池として、酒津から河口までの東高梁川の廃川跡は、工場や運動場、農地として利用された。明治44(1911)年に起工式を行い、大正8(1919)年度までに築堤工事を終え、翌年度からは締め切り工事と、東西用水など付帯事業に着手し、大正14(1925)年にすべての工事を完了した。

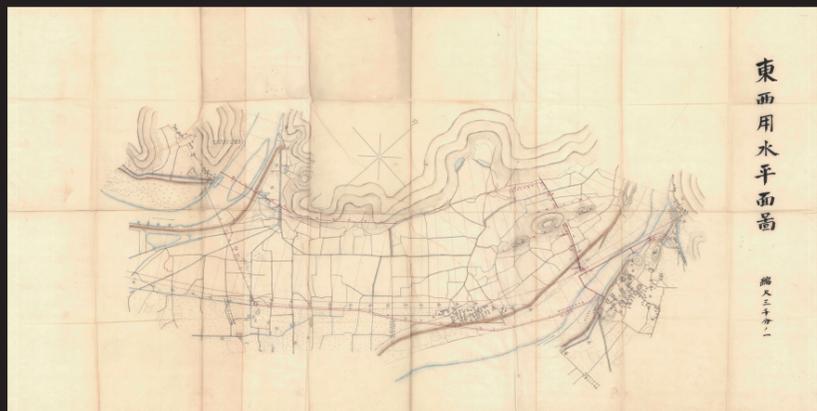
高梁川改修の効果は、昭和9(1934)年9月の室戸台風で発揮された。岡山県内では吉井川、旭川の流域一帯で、高梁川でも上中流域では甚大な被害が出たが、改修区間では破堤もなく、被害は最小限に食い止められた。竣工当初は「バカ堤防」と揶揄されていたが、室戸台風直後の新聞記事では、「毅然眞價を發揮した“酒津新堤防の存在”思ひ切った設計は見事に奏功 設計者の先見の明」と賞賛に変わっている。



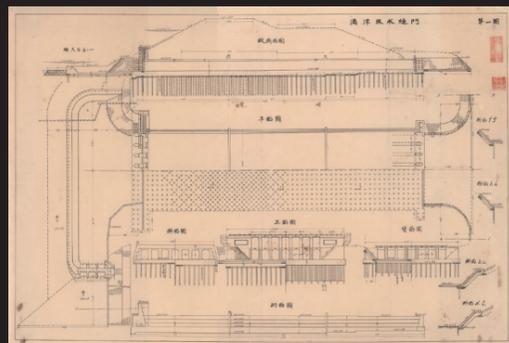
1. 竣工時の高梁川堤防



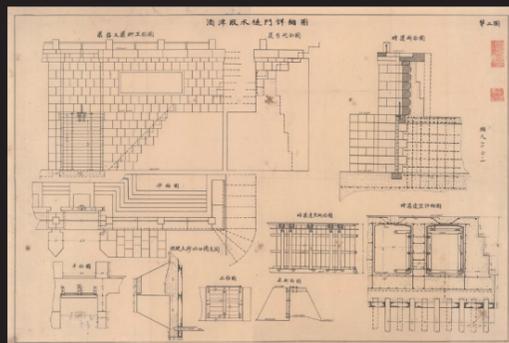
2. 現在の高梁川堤防



3. 東西用水平面図



4. 酒津取水樋門 第一圖



5. 酒津取水樋門詳細圖 第二圖



6. 工事中の酒津取水樋門



7. 現在の酒津取水樋門

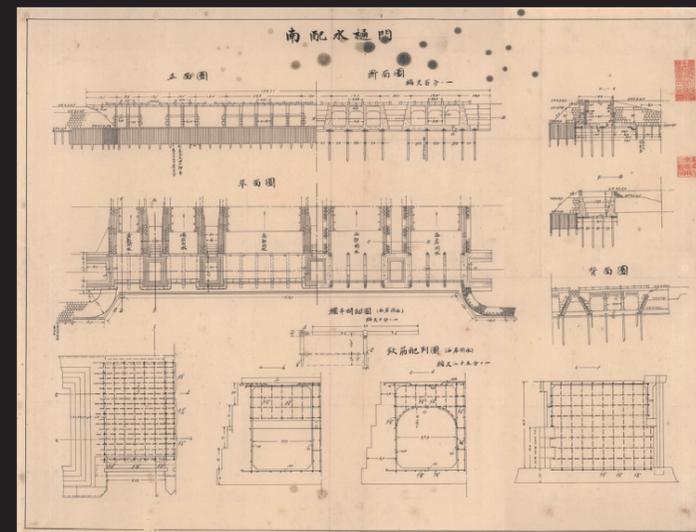
## 東西用水酒津樋門 — 市民の憩いの場 —

高梁川改修事業の付帯事業として、用水を統合(合口化)する高梁川東西用水工事も実施された。酒津付近の高梁川両岸では12カ所の用水が別々に取水しており、渇水期になると用水争いが絶えなかった。そこで高梁川の改修工事を機に、取水口を1本化し、従来の取水慣行を尊重して、農業用水を分配する利水システムが整備され、大正13(1924)年に竣工した。

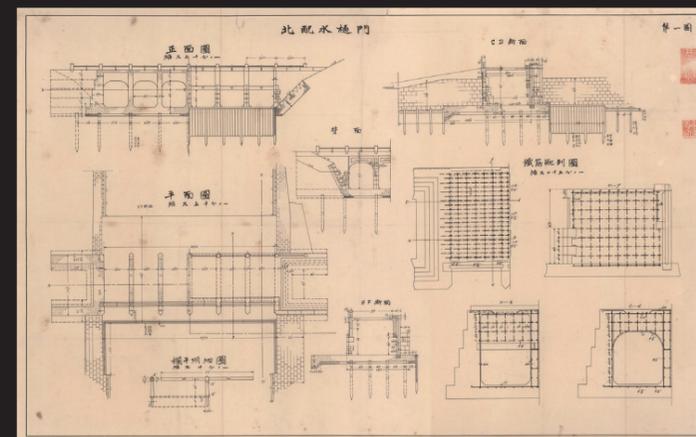
当時の岡山県知事の名に由来する「笠井堰」で堰き止められた高梁川の水は、左岸側に新設された7門の取水樋門で取水され、堤防下の暗渠を通じて、東高梁川の廃川跡に造られた3.1haの配水池に入る。そこで一旦、貯留された水は、砂を沈殿させた後、南北2ヶ所の配水樋門によって配水されるが、これまでの取水慣行に従って、各用水の水門の幅、門数が決定された。15門の南配水樋門からは、倉敷用水(1.18m×2門)、備前用水

(1.38m×2門)、南部用水(1.57m×5門)、西部用水(1.76m×3門)、西岸用水(1.75m×3門)が、北配水樋門からはハヶ郷用水(1.70m×6門)が分配されている。なお、西岸用水は高梁川の底をサイフォンで横断し、右岸側に送られている。樋門は鉄筋コンクリート造の表面に花崗岩を貼った重圧な外観で、下流側のアーチ上部と柱には洗い出しコンクリートによる装飾が施してある。ちなみに南配水樋門は、国内で最大の門数を誇る現役の農業用樋門でもある。

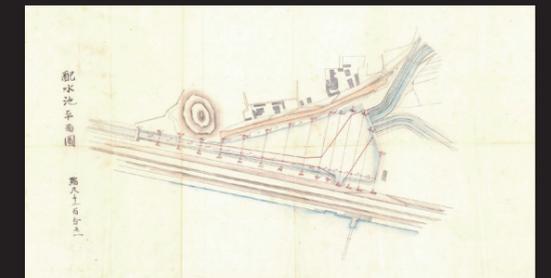
東西用水酒津樋門は、倉敷平野から児島湾干拓地までの農地約3600haを潤す源であるとともに、一帯は酒津公園として整備され、春は桜の名所として、夏は子供たちの格好の水遊び場として、市民に広く親しまれている。(樋口輝久)



8. 南配水樋門



9. 北配水樋門



10. 配水池平面図



11. 竣工時の高梁川東西用水組合事務所



12. 現在の酒津配水池と取水樋門の背面



13. 竣工時の酒津南配水樋門



14. 現在の酒津南配水樋門



15. 竣工時の酒津北配水樋門



16. 現在の酒津北配水樋門